

フランシス・ベーコンの自然探求という宗教

下野 葉月

1. はじめに

フランシス・ベーコン(1561-1626)の思想は、自然科学の方法——観察にもとづき、実験によって証明される原理を導き出すという方法——を用意したとして、自然科学との結びつきが注目されがちである。しかし、彼の思想を形付けたものと、現在自然科学に認められる目標とを同一のものとして看做すことはできない。多くの場合、自然科学は生活の向上を求め、人間にとって有用なものの生産がその目的として理解される。しかし同時に自然科学には人間にはまだ知り得ない宇宙や自然に関する未知の事柄を解き明かそうとする純粋に探求的な側面もある。ベーコンが称揚し且つ実際に彼自身が携わった自然探求の活動も、人間生活に有用なものをもたらすためだけではなく、未だに知られざる事柄を解明しようとする動機があったと言える。そのように自然という神秘に満ちた世界を探り、その成り立ちを理解しようとする行いは、「宗教」との関係が深いと言えよう。言い換えれば、自然探求はしばしばベーコンによって「宗教」であるかのように、あるいは宗教的目標があるかのように提示されるのである。しかし、なぜベーコンは自然探求を宗教であるかのように、または宗教的目標があるかのように提示したのだろうか。それには、当時のキリスト教内でおきていた分裂とそれがもたらした多くの争いに関係していた。宗教改革を経てキリスト教界にもたらされた分裂や混乱こそ、ベーコンをして、それらを乗り越えるための何らかを求めさせ、とりわけ自然の中に新たな宗教の理想を見出させるに至ったのだと考えられる。

ベーコンの宗教思想に着目した研究は近年いくつか提出されてはいるものの、彼の自然探求への傾斜が宗教をめぐる争いの不毛さを出発点とするという主張はなされていない⁽¹⁾。当時ベーコンが憂慮した宗教をめぐる争いがベーコンの宗教的関心を自然へと向寄せたというのが本論の主張である。ベーコンは当時の宗教をめぐる状況を憂慮し、何が問題であるか分析した上で、いかに宗教が改善され得るか述べている。そうした宗教をめぐる哲学的考察は、彼が後に展開する自然探求の積極的な推進と無関係ではない。混乱した宗教の実態について考察した上で辿りついたものこそが、自然とその探求への関心であったのではないだろうか。本論文でははじめにベーコンによる当時の宗教批判と彼が掲げた宗教の理想像を確認し、彼がどのように自然哲学をそうした宗教的文脈にのせていくかを辿る。そして、自然哲学の最終目標として据え置かれる「至上の自然の法 (Summary Law of Nature)」たるものがいかなるものであるかを理解するために、その基礎となる「自然の法」の性格を分析しながら、至上の自然の法の習得が何を意味していたのかを検討したい。

2. ベイコンの宗教観

ベイコンの著作を見渡すと、しばしば彼が宗教をめぐる状況を批判的に述べる箇所に遭遇する。例えば『英国教会の論争について広く訴える *An Advertisement Touching the Controversies of the Church of England*』という論考では、当時の宗教の扱われ方に対するベイコンの批判が展開される。この著作は1589年、フランス国王アンリ三世がカトリック陣営に暗殺された年に執筆された作品で、当時は一度も出版されることなく、ただベイコンと共にエリザベス女王に仕えていた宮廷人のみが読んだと考えられている。言い換えれば、この作品は多くの人々によって読まれることを目的として書かれたのではなく、あくまでも国教会の管理に携わる宮廷内の人々に向けた政治的勧告として書かれたものであった⁽²⁾。この作品の中で彼が最も警戒するのは、宗教が笑いの材料としてパンフレットや演劇において面白おかしく提示され、嘲笑的になっているということである。当作品において具体的に扱われた問題は、マーティン・マーブルレイト (*Martin Marprelate*) という改革派(清教徒)の人物によって1588年から1589年にわたって書かれ出版されたパンフレットの中で、国教会の司教や関係者が茶化され面白おかしく描かれていること、そしてそれに対抗するために国教会側が改革派を嘲笑する演劇をロンドン市内の劇場で上演させているという問題であった⁽³⁾。ベイコンはこうした状況の中でどちらの側に加担するのでもなく、双方によって展開されている論争が「宗教」に対する危機であると批判する。同時に彼は「宗教」をめぐる展開された実際の争いごとを通して、何が「宗教」の名に相応しくないのかについて考え、その思考過程である一定の理想的な「宗教像」を提示するに至る。

『英国教会の論争について広く訴える』の中でベイコンが盛んに批判するのは、「宗教に関する事柄が演劇のようなスタイルで取り扱われること」である。

悪に対する敬虔で宗教的な憐れみの念、そして過ちに対する憤りの念を捨てて、宗教を喜劇や風刺に転じてしまうこと (*to turn religion into a comedy or satire*)、または傷をみつければそれを笑い顔で開くこと、ときに聖書と口汚さを一文のうちと一緒におさめてしまうことは、キリスト教徒の敬虔な威徳からかけ離れており、冷静な人の誠実な眼差しとして相応しくない。嘲りと真剣さの混同ほど大きな混乱はない。⁽⁴⁾

当時展開されたパンフレット論争や上演されていた風刺劇にみられる蔑みは、「宗教の厳かさ」とはかけ離れたものであり、宗教に悪影響を及ぼしているとベイコンは考えた。人間が持ちうる敬虔なもしくは厳かな気持ちに依拠している宗教の「厳かさ」は、嘲笑されることによって打ち消されてしまう。そのため「宗教的事柄の中から楽しみや癒しを得てしまった」者は、そうした行いを「狂気として恥じるべき」なのだとは彼は述べ、宗教を材料とした風刺を読むにあたって、「人々は気をつけねばならない」と忠告する⁽⁵⁾。宗教を材料とした笑いは、「宗教的な感覚」を剥ぎ取ってしまうものであるがために、慎むべきものであり、嘲笑は論争と並んで人々を宗教から離れさせてしまうとベイコンは考えた。

以上のような批判に加えて、ベイコンは宗教が熱狂的な個人の主張のために用いられていることに対しても批判的であった。ベイコンによれば、宗教において人々は過激な論争をもって意見

を戦わせるのではなく、静かに穏やかな勧告を行なうべきなのである。『英国教会の論争について広く訴える』の中で批判に晒されるのは、宗教に対する嘲りだけでなく、論争の「争い」の部分であり、それが冗長であるだけでなく増幅され、対立が激化されていくことであった。

昨今見られるような過激さや熱狂を捨て、大方主張やある一定の見解に固執するのを好まなかった使徒達、初期教父達の福音を再現することができるなら、助言や勧告を施すことになる。そうすれば、我々には何の治療も必要ない。⁽⁶⁾

ベーコンは国教会と改革派の対立が激化していた当時の状況を観察し、争いが絶えない理由を言論のマナーのあり方に見出す。争いは、当事者たちが主張を続けるからこそ継続するのであり、また双方がお互いを否定し抑圧しようとするからこそ激化する。そして主導者たちが賛同者を硬く団結させることによって、分裂はより際立ったものになる。そのためベーコンがまず批判するのは、そうした宗教をめぐる論争において見受けられた言論のマナーであった。「聖ジェームズのかかげた静寂さとゆっくり話すことの美德を知るのであれば、我々の論争は収束し、共に成長することができる」とベーコンは指摘する⁽⁷⁾。ゆっくりと話すことが美德として認められているのは、当時ベーコンが耳にしていた宗教に関する言論のあり様が、強い主張に特徴づけられていたからだと考えられる。主張とは自分の意見などを声高に述べることであり、そうした言論のあり方は信仰へと結びつかないのだとベーコンは言う。

あなたが自らの主張を助言として提供するのであれば、あなたの勧告は勧告であるが故に、敬意が払われたことでしょう。なぜなら信仰はあなたの確信には依拠しないのです。⁽⁸⁾

ベーコンは当時の宗教者を論ずかのように、彼らの言論のマナーがいかに信仰を促すのに適していないか指摘する。彼らの言論マナーは自己の確信に依拠した主張に特徴づけられ、それは人々を信仰へと導くのではなく、人々を恐れや怯えといった感情に導くのだとベーコンは批判する。

聖パウロはこのように話した「主ではなく私は(‘Ego, non Dominus’; ‘I, and not the Lord’)」「私の勧告としては(‘Et, secundum consilium meum’; ‘according to my counsel’)」。しかし今の人にはあまりにも軽々しく「私ではなく、主は(‘Non ego, sed Dominus’; ‘not I, but the Lord’)」と口走る。そしてそれを彼(神)の審判による強い非難にからませ、単純な人々を恐怖へと陥らせている。彼ら(人々)はサロモンから「原因のない呪いは来ない(‘the causeless curse shall not come’)」ということ十分に学んでいない。⁽⁹⁾

ここまでの議論で鮮明に現れているのは、当時見受けられた「争い」を「宗教」に相応しくないものとして提示するという姿勢である。聖パウロや聖ジェームズの言葉を引用し、「原初の教会の教父達の祝福された行いを再生することができるのなら」争いが収束される、と考えたベーコンは教父たちにキリスト教および「宗教」の理想を見出している。その理想のなかで、宗教者らは主張を行なうのではなく、穏やかに勧告を行ない、人々の信仰を促すのであった。

更にペイコンは当時の宗教をめぐる争いについて哲学的な考察を行い、そこに宿る根本的な問題を浮き彫りにする。『隨筆集 *The Essays or Counsels Civil and Moral* (1625)』におさめられた「宗教の統一について *Of Unity in Religion*」という論考の中で彼が問題視するのは、本来であれば一つの教会であるところのキリスト教会が分裂し対立していること、そして国教会が典礼や儀式など様式的な画一性を強制しているという実状である。理想となるのは分裂や対立のない神の教会で、そこで要請されるのは画一 (*uniformity*) ではなく統一 (*unity*) だと彼は訴える。ペイコンはそれらの違いを明確に示し、平和で争いのない世の中を求めるにあたって追求されるべきは、画一性ではなく統一なのだと訴える。

人は神の教会を二つの種類の論争で分裂させることに注意しなければならない。(中略) たとえば初期キリストの教父の一人が注意しているように、「キリストの着物には縫い目がない。だが教会の衣装はさまざまである (*Christ's coat indeed had no seam, but the church's vesture was of divers colours*)」ということがある。それについてその人が述べているのは、「衣装に変化があってもよい。だが裂け目があってはならない (*In veste varietas sit, scissura non sit*)」

ということである。統一と画一は異なる (*they be two things, Unity and Uniformity*)。⁽¹⁰⁾

当時エリザベス一世によって発令された国教会の「統一令」は、共通祈禱書の中で規定された礼拝の作法を守ることを各教会に義務づけ、教会で司教が着用する服装や祭壇の作り方などに至るまで細かな規定が盛り込まれていた。それが全ての教会に強制され、違反を犯したと判断された教会の司教に対して処罰——保釈金の支払いか投獄——が課されていた。これは改革派の教会が国教会に対抗する勢力になり兼ねないと警戒したカンタベリー大司教のジョン・ウィットギフトによる戦略に因るもので、典礼のあり方が少しでも違うという理由で、改革派の教会の聖職者は弾圧されるという憂目にあっていた⁽¹¹⁾。その弾圧の主導者であったウィットギフト大司教はケンブリッジ大学に在学中のペイコンに学習指導を施した人物であったが、ペイコンは改革派の信仰をもつ母の影響を強く受けて育ったため、弾圧されていた改革派の教会に同情していた。改革派の人々の考えでは、イングランド全土の教会がどこも「画一的」に同じようなスタイルでミサを行なう必要性はなく、教会はそれぞれの伝統や風習にあった形式でミサを執り行えばよく、彼もそうした考えに賛同していたのである。皆が同じ形式の儀礼を執り行うという画一性が「統一」の名において求められる必要はないし、これらは概念としても異なる性質のものである。

なぜペイコンは「統一」という概念を「宗教」のあるべき理想像として提出するに至ったのか。この問いに答えるためには、彼の生きていた時代に見られた争いがキリスト教界を分裂させていたという実状を考慮しなければならない。分裂の状態は、神を中心としたキリスト教の「神の教会」という統一的概念と相反するものである。ユグノー戦争で対立していたカトリックもプロテスタントも、イングランドで対立していた国教会と改革派の人々も、同じキリスト教徒であるのだから分離するのではなく、同じ神を崇拝する者として統一されるべきだとペイコンは考えたのであった。

ペイコンは宗教の統一がもたらす効果を「外的」なもの、「内的」なものに分けて分析する。

外的には統一が破られた場合の弊害として、人々が教会に寄りつかなくなり、教会を軽蔑するようになること挙げ、そして内的には、統一は平和をもたらし、信仰を確立し、慈悲心を燃え上がらせるといった効果を認めている⁽¹²⁾。統一が宗教上の理想となるのは、それが社会的な絆をつくり連帯を強化するからでもあった。ベーコンは「宗教というものは、人間社会の絆として主要なものであって、それ自体が統一という真の絆の中にしっかりと入れられているときには、すばらしいものになる (Religion being the chief band of human society, it is a happy thing when itself is well contained within the true band of Unity.)」と考えていた⁽¹³⁾。宗教が人間社会の絆となりうることを理解していたベーコンにとって、「宗教の統一」は当時繰り広げられていた争いを収束させるという理想への解を提供するものでもあった。争いが卑劣なものに発展していくのを目の当たりにし、宗教が分裂して行く様を観て嘆いていたベーコンは、そうした争いを鎮圧するための解として「統一」という理念を提出するに至ったと考えることができる。

ではなぜそうした統一が実現されないのか。ベーコンは「宗教をめぐる論争や分裂という弊害は異教徒の知らないものであった」と述べ、そもそも分裂という状態はキリスト教特有のものなのだ指摘する。その理由としてベーコンは、「異教徒の宗教というものは祭式や儀式によっていることが多く、持続性をもつ信念ではないから」だとする⁽¹⁴⁾。この観察の是非の判断は留保するにしても、ここでベーコンはキリスト教の特質を他宗教との比較から見定めようとし、またその中で宗教をめぐる論争や分裂をキリスト教ならではの現象として認めている。ではどうして論争や分裂がおきているのか。

真の神はこのような性質を持っている。それは彼が嫉妬深い神であるということである。そのためその崇拝や宗教には、混じりものがあつたり、比較相手のあつたりすることは許されないのである。(But the true God hath this attribute, that he is a 'jealous God'; and therefore his worship and religion will endure no mixture nor partner.)⁽¹⁵⁾

ベーコンはキリスト教において分裂や争いが起き得る理由をキリスト教の「神」の嫉妬深さ (jealousy) に帰している。人々がそうした性質の神に依拠して主張を行うからこそ対立や分離が生じるのだとベーコンは考えた。しかし彼はキリスト教が排他的だと言いたかったのではなく、むしろ多くの反対者ではないものを取り込む引力をもつのだと指摘する。

ただ、我々の救世主自身の筆によるキリスト教徒の連盟綱領の、それ (統一) に関する二つの相反する文章を、しっかりと、またはっきりと説明しなければならない。それは「我々と一緒にないものは我々に反対のものである ('He that is not with us is against us')」⁽¹⁶⁾というのと、また「我々に反対でないものは我々と一緒にいるものである ('He that is not against us is with us')」⁽¹⁷⁾というのである。⁽¹⁸⁾

この箇所は信者とそうでないものの分離を促す一方で、信者ではなくても反対者でない者の統合を勧めるものである。ベーコンは「統一」を宗教における理想として見据えながらも、キリスト教には分裂を引き起こす原理があることを認めている。しかし同時に反対者でなければ統合され

うる可能性があるため、ペイコンはキリスト教における争いの収束を諦めているのではなく、むしろそうした統合的な可能性に希望を見出していると考えられる。

以上のようにペイコンは当時の宗教状況を批判的に捉えるだけではなく、何が問題の原因となっているのか、そしてどのような状態が理想的であるかを分析する。その理想を具体的に想起させたのは当時繰り広げられた宗教をめぐる争いや分裂であり、そうした実態からペイコンは統一や穏やかさという性質を宗教的営みの理想として考えるに至る。そしてペイコンの著作から読み取れるのは、彼がそうした理想を自然探求のうちに見出すというテーゼである。言い換えれば、ペイコンは自然探求をもって、宗教界においては見失われてしまった統一の理想を再現しようとしたと考えられる。

3. 自然探求の宗教性

ではペイコンはどのようにして自然探求が宗教的営みとして成立すると考えたのか。これは第一にペイコンが自然そのものを神の存在証明として捉えていたことにはじまる。ペイコンは神の存在を否定できないものとして認識し、神の存在は「自然」において明らかに証明されていると考えた。「無神論について Of Atheism」という論考の冒頭でペイコンは、自然もしくは世界のあり様そのものが神の存在証明となっていると論じる。

神が奇跡をおやりになったのは無神論を反駁なさるためではなかったのである。それは、その(神の)ふつうのお仕事(神の)が反駁となっているからである(And therefore God never wrought miracle to convince atheism, because his ordinary works convince it)。⁽¹⁹⁾

ペイコンにとって自然や世界のあり様そのものは既に創造主である神の存在を証明している。彼がそのように考えた理由は、彼が自然の中に認められるものごとの連鎖の中に神の摂理を見出しているからに他ならない。

なるほど、少しばかりの哲学は人間の心を無神論に傾けさせる。だが、哲学に深く入れば人々の心は宗教の方にまた向かうことになる。人間の心は第二原因が散らばっているのを眺めながら、それらに安住して、それ以上進もうとしないということがあるかもしれないからである。だが、それらの鎖が結ばれあい、つながりあっているのを見るとき、それ〔第二原因の連鎖〕は天の摂理や神性へ飛んでいかないわけではない。⁽²⁰⁾

ペイコンの考えでは、自然を観察しそこに認められる第二原因を哲学的に追究していくことによって第一原因である神へ辿りつくのは当然のことなのである。

そして自然探求が宗教的営みとして成立する第二の理由として、ペイコンは「二冊の書物」の比喩——聖書と自然——を用いて、聖書の探求だけではなく自然の探求にも宗教的な意義があると主張する⁽²¹⁾。彼は前者の研究を神学、後者の研究を哲学と呼び、「双方において無限の進歩と上達を遂げるようしなければならない」と訴える⁽²²⁾。しかし二者のうち彼がより重点を置いたの

は神学ではなく哲学の方であった。なぜならば、前述したように、啓示や神の権威に依拠して繰り広げられていた神学的論争は「宗教」の尊厳や敬虔さを損ねていたと考えていたからである。もっともベーコンは聖書の啓示を軽んじるようなことはない。ただ啓示に依拠した神学的議論を継続することに新たな可能性を見出さないのである。『学問の進歩』の末尾に書かれた神学に関する議論の中で、ベーコンはそのことをはっきりと表明する。

以上のこと〔神学に関すること〕をわたくしは、ごく簡単にかたづけしてしまったのであるが、それというのは、これには欠けているところがあるとはいえないからである。すなわち、神学の問題においては、あいたままでまだ種のまかされていないような場所や地面は見つからないのである。人びとは、よき種をまくことに、あるいは毒麦をまくことに、それほどまでせっせとはげんだのである。⁽²³⁾

「聖書」に依拠した神学的な議論は争いをもたらすだけで「宗教」の尊厳を損ねかねないからこそ、神が残したもう一つの書物である「自然」を頼りに、その哲学的探求に新たな可能性が見出されるべきだとベーコンは考えた。その可能性が宗教的なものであったと言えるのは、彼が自然の理解が啓示理解の鍵となると位置づけるからであり、また自然の知識が増えることによって当時蔓延していた宗教に対する軽蔑や不信を鎮めることにもなると明示するからである。ベーコンは『ヴァレリウス・テルミヌス *Valerius Terminus* (1603)』という著作で以下のように述べている。

宗教が親しく自然的知識の増大を守る極めて重要な理由が二つある。一つは、それが神の栄誉をより讃えるよう導くから（中略）そしてもう一つの理由は、それが不信や誤謬に対するただ一つの助けであり予防薬となるからである。なぜなら我らの救い主はこのようなことを言っている「聖書も神の力をも知らずに、そちは誤りをおかす（‘You err, not knowing the Scriptures nor the power of God’）」。神は過ちから救われたいのであればと我々に二冊もしくは二巻の書物を学習するようにと置いてくださった (*laying before us two books or volumes to study if we will be secured from error;*)。聖書は神の意思を開示し、そして創造物は彼の力をあらわす (*first the Scriptures revealing the will of God, and then the creatures expressing his power*)。後者の書物(自然)は、前者(聖書)が教示することが不可能だと考えられることのないように保証してくれる。そして最も確かなこと、経験にもとづく本来の結論は、少しばかりの自然哲学は精神を無神論へと導くが、更なる探求は精神を宗教へと引き戻すのである (*a little natural philosophy inclineth the mind to atheism, but a further proceeding bringeth the mind back to religion*)。⁽²⁴⁾

ベーコンは自然の探求を、不信や誤謬などに代表される宗教離れを予防するものだと考えるだけではない。自然の探求を本格的に行えば、その行い自体が探求者を宗教へと導くのだと考えた。こうした考えに沿ってベーコンは、自然哲学を「宗教に最も忠実な侍女」と位置づける。

自然哲学は神の言葉に次いで、迷信の最も確かな療法であり、信仰の全く試験済みの栄養

である (At vere rem reputanti, Philosophia Naturalis, post Verbum Dei, certissima Superstitionis medicina est; eademque probatissimum Fidei alimentum)。それゆえに、正当にも宗教に最も忠実な侍女として付け与えられる (Itaque merito Religioni donator tanquam fidissima Ancilla)。(中略) 何れにせよ、人々の心の間に最も大きな勢力をもつ宗教が、或る人々の無知と無思慮な熱意とによって、反対の側に連れ去られた以上、自然哲学の成長が阻まれたとしても、何の不思議もないのである。⁽²⁵⁾

自然哲学は宗教を確立する助けを果たすものであり、両者は共存関係にある。だからこそ、人々の心に多大な影響を与えることができる宗教がその効力を十分に発揮できなくなってしまった後、自然哲学の成長も阻まれてしまったのだとバークレーは理解する。そのような両者の相互的關係から類推されるのは、自然哲学を改善し復興させることによって宗教も活性化するという理論である。

4. 自然に見出される統一

ここまで自然哲学が宗教的な役割を果たすという考えにふれてきた。ここからはいかに自然哲学が宗教的理想である統一を果たしうると考えられたのかを追ってゆく。当時のキリスト教界において果たされていなかった「統一」は、いかに自然哲学において実現可能だと考えられたのか。それは彼が思い描いた自然哲学の学問構想にあらわれる。自然哲学という学は、自然の実践的な知識から成る自然誌を基礎として、理論的な知識を扱う自然学と形而上学へと上昇し、事象が順次一般化されていくピラミッド状のものである。自然哲学における自然探求の行為は、多なるものから次第に一なるものへと近づく聖なる行いだとバークレーは考えた。

すなわち知識はピラミッドのようなものであって、誌 (history) がその基礎である。自然に関する哲学についてもそうであって、基礎は自然誌であり、基礎のつぎの段階は自然学であり、頂点に近い段階は形而上学である。頂点にある「はじめから終わりまで神のなされるわざ」すなわち、至上の自然の法についていえば、人間の探求がそれに到達することができるかどうかはわからない。上述の三段階は、知識の真の段階であるだろうが、墮落したものらには、まるで巨人たちの山なのである。「かれらは、ペリオンの山の上にオッサの山を三つ重ね、そしてオッサの山に木の葉の茂るオリンポスの山をころがそうとした」。⁽²⁶⁾ しながら、すべてを神の栄光に帰するものらにとっては、上述の三段階は「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」⁽²⁷⁾ という三度の歓呼のようなものである。すなわち、神のみわざをひろくあるいはくわしく記述する点で聖であり、みわざを結合しあるいは連結する点で聖であり、そして、みわざを永久で斉一な法に統合する点で聖なのである。⁽²⁸⁾

自然哲学の営みはその各段階において「聖なる」ものであるように、その営みは頂点において、「至上の自然の法」もしくは「永久で斉一な法」において統合され「聖」とみなされている。彼は別の著作で、その頂点から自然神学への道は近いのだと述べているように、彼にとって自然哲

学——自然に関する学的な探求——は至上の一なるものへと集約される「統一的」な営みとして描かれ、そのようなイメージに宗教における統一の理想が見出されていたと考えられる。

自然探求の目指すところ、つまり頂点に掲げられているのは「至上の自然の法」と呼ばれるもので、それは「みわざが永久で斉一な法に統合される」という表現から推測されるように、神の御業である被造物を統括する純粹に概念的なもので、具体的にどのようなものであるかについては定義されていない。

この「至上の自然の法」がいかなるものであったかを理解するために、それに関連する「自然の法」たるものがどのようなはたらきを成していたか見て行こう。ベイコンによれば、世界が創造された時から「自然の法」が創造物すべてを横断してはたらいており、世界はその法によって統治されている。そうした彼の創造観は『信仰告白*Confession of Faith*』という著作に詳しく記されている⁽²⁹⁾。

神は天と地を創造し、また多くの生けるものをも創造した。そしてそれらに、我々が自然と呼ぶ不変で永遠なる法を与えた。それは創造の法に他ならない。⁽³⁰⁾

こうした法の概念は、自然に神が宿っているという考え方を無効にする。実際のところベイコンは、神による自然の管理が法を介して間接的になされていることを別の著作で強調している：「神が自然のなかで第二原因によってのみそのみわざを行うことは確かなことであって、それがそうでないと信じさせようとするなら、それは神に対するおためごかしの、まったくのまやかしであり、真理のつくり主にけがらわしい虚言の生贄をささげること」なのだ⁽³¹⁾。自然の法は神の自然への間接的な関与を担保し、また創造という六日間の行いの後の関与の持続性をも保証する。

現在も持続し、世界が終わるまで侵されることなく統治する自然の法は、神が仕事から手を休み、創造をやめたときからはたらきはじめている。⁽³²⁾

神が世界創造の後どのように自然と関りを持ち続けているかという問題は、「法」概念を導入し、それが休むことなく自然を「統治」しているとすることによってある程度解決する。「自然の法」たるものは創造時からはたらき続け、それによって神は自然を「統治」しているのである。

5. 自然の法の性格

ベイコンは近代的な自然科学の興隆と結びつけられて一般的に受容されているがために、彼の言う「自然の法」は数式によって表される自然科学上の法則だったのではないかと想像されてしまうかもしれない。例えば、ニュートンによる万有引力の法則や、ロバート・ボイルの「ボイルの法則」などは現在でも物理の教科書に必ず出てくる自然の法則である。しかし、ベイコンがそのような自然科学的な「自然の法則」——数学的に表現された式——を想定していたかどうかは判断し難い。なぜならば、ベイコンは数学に今後の自然探求を助ける可能性を見出しながらも、

自身の自然哲学的研究の成果を数式を用いて表すような場面がないからである。しかし、彼は自然に関する学問において数学が発展的に使用されるようになることを想定していた⁽³³⁾。その一方で、バイコンは数学を根本的に「定量を考察するもの」、ある決められた範囲内の事象を測定および表現するものと捉えていた。彼によれば、数学には純粹数学と混成数学があり、前者は「自然哲学のいかなる一般の命題からもまったく切り離された、定量をとり扱う諸学」で、後者は「自然哲学のある一般の命題を主題として、それらに付随し、それを助けるかぎり定量を考察する」ものとして位置づけられる。

自然の多くの部門は、数学の助けと仲介なしには、十分こまかな点にいたるまで発見されることもなく、十分あきらかに証明されることもなく、十分たくみに実用に供されることもない。そしてこのような数学の助けをうける学問には、光学、音楽、天文学、宇宙誌、建築学、機械工学などがある。(省略)混成の数学についていえば、自然が今後更に解明されてゆくにつれて、ますますその種類を増すに相違ないということだけは予言してよいだろう。⁽³⁴⁾

バイコンは数学の発展的な可能性を認めながらも、それを基本的には決められた範囲内の「定量」を示すものと考えた。バイコンは天体の運動の幾何学的表現に関しても、それが天体の動きの実態を表しているのではなく、ただ天体の見え方を任意に方式化したものだと考えたのである。数学は自然哲学において重要なはたらきを果たすが、基本的には自然哲学に従属させられる。数学は確実性をもたらすが、自然哲学それ自体を生み出すものではないという考えをバイコンは保持していた⁽³⁵⁾。

そのため、ここから検討すべきはバイコンの思想にあらわれる「自然の法」がいかに関自然科学上の法則に類似するかではなく、数学的に表現されない「自然の法」に込められた意味の広がり、「至上の自然の法」たるものを想起させた彼の思考である。それは彼の思想における自然と道徳の関係性を示してくれる。

バイコンは自然界の動きのなかに数学的に表現することのできない法則性——道徳的な法則性——を見出す⁽³⁶⁾。道徳的な法則性がバイコンの「自然の法」に認められるのであれば、彼の「自然の法」は、自然科学における「自然の法則」のように自然界に見られる物理的な動きを端的に示すものではなく、神や善といった価値により基礎づけられた「自然法」の概念に近いものであったと解釈できる⁽³⁷⁾。バイコンは、善を求める傾向について一般的に述べている場面で、磁石と水の動きを例としてあげ、その動きに善への希求とすべき傾向を見出す。

それゆえ、われわれのみるとおり、鉄は特殊の共感によって天然磁石の方に動くが、しかし、それでも、一定の量をこすと、それは磁石への共感を捨て、善良な愛国者が同族の団体のいる土地におもむくように、どっしりした物体の存在する地域と国である大地の方に動くのである。同様に、また別の例をとれば、われわれのみるとおり、水とどっしりした物体は地球の中心に向かって動くが、しかし、それらも、自然の連続がたちきられるのをゆるすよりは、むしろ地球の中心から上に向かって動き、世界への義務のために地への義務を捨てるのである。

⁽³⁸⁾

水は大地へと向かう傾向をもつとされていたが、ベーコンはその水が「自然の連続」という全体的な連鎖のなかに位置づけられると、水固有の地球の中心へと向かう傾向を捨て、それとは逆に「上に向かって動き、世界の義務のために」動くのだという。つまり磁石や水など自然界の物質にも、個を犠牲にしてより大きな集団の目的のために動くという「道徳的」な特性がみとめられるのである。ベーコンによれば、全てのもが善の傾向をもつ理由は、一つには「すべてのものがそれ自身において全体あるいは独立のものであるから」であり、またもう一つは「それがいっそう大きな団体の一部あるいは一員であるから」である。この二つのうち後者のような善の方が「力も強く値うちも大きい」のは、後者が「いっそう一般的な本質の保存に向かうから」であると定義される。この後者の善の定義通りに磁石や水も動いていると観察したのである。

そのような「善」のあり様は自然のみに限らず人間社会においても求められる。人間が自分個人を優先させることよりも、個人が全体を構成する一員として、公共の義務を果たすことの方が尊いことなのである。

この二種類の善とそれらの相対的な価値は、墮落していない人間にもっともくっきり刻印されているのであって、人間にとって、公共への義務を守ることは、生命と生活を保持することよりもずっと大切なものでなければならない。それは大ポンペイウスのあの記憶すべきことばのとおりであって、かれは、ローマにおける飢饉のために食糧供給に専心して、かれの周囲の友人たちから、この荒天に出航するような危険を冒さないようにとはげしく、しきりに引きとめられたとき、かれはただ、「航海が大事だ、わたしの生きることは大事ではない」と言ったのである。⁽³⁹⁾

以上のようにベーコンは、自然および人間社会において同じように発揮される善の法則性があると観察している。そのような善への傾斜は自然と人間社会を分け隔てることなく縦横し、善の法則を成立させている。実際のところベーコンは自然のうちに「正義の源」があると考え、そこから社会の法律が発生したのだと考えた。

自然のうちにある正義の源が存在していて、そこから、すべての社会の法律はただ河川としてのみ流れ出るのであり (For there are in Nature certaine fountains of Justice, whence all Ciuill Lawes are deriued), そして河川の水が貫流してくる土地の色と味をもつように、社会の法律も、同じ源泉から発しながら、その法律のつくられた地域と統治に応じてさまざまに変わるのである。⁽⁴⁰⁾

このように自然に認められる正義の源を基軸とした「法」の考え方に沿って、「自然の法」もまた人間社会の法も形成されたと考えられているのである。つまり彼の思想において、自然界と人間社会は相即的な関係にあり、現代において自然科学と社会科学もしくは人文社会学が区別されるように、必ずしも別の次元に存在していたのではない。ただ法による統治に携わるのが誰なのかによって違いが生じるが、自然界も人間社会も法によって支配されているという点においては

類似関係にある。実際のところ、ペイコンは「法による統治」という共通項において神と人間を照応関係に置く。

神が自然の法によって治めたもうたように、王たちは彼らの法によって統治した。そして神が奇跡を行う力をめったにお使いにならないように、王は至高の大権をめったに用いるべきではない。⁽⁴¹⁾

6. 自然の法を求める人間

法による統治という概念のもとで神と人間は類似する立場に置かれたが、では人間はどのようにして神と関係をもつことになるのか。この問題にも「法」が関わる。「至上の自然の法」を見出すことが自然探求の目標として提示されていたように、神によって置かれた「自然の法」を見出すという行いは神が人間に課した仕事として解釈されうる。なぜならばペイコンによれば、人間は自然あるいは世界の中に法を見出すべく神によってデザインされているからである。

神は人間の精神を鏡かレンズのようにつくられたので、それは全世界をうつすことができ、目が光をやどすことを喜ぶように、全世界の像をやどすことを喜ぶとはっきりと述べている。そして人間の精神は、さまざまなものと季節の移りかわりとを見ることを楽しむだけでなく、それらすべての変化を通じてまちががなく認められる法や命令(ordinances and decrees)を見だし、見分けたいと願うのである。⁽⁴²⁾

しかし「至上の自然の法」にまで人間が至ることができるかどうかについては、議論の余地が残される。それは人間によって見出されることはない、「伝道の書」にほのめかされているが、発見の可能性を妨げている障害さえ解消されれば、それを見出すことができるのだとペイコンは指摘する。

ソロモンは、かれが「神のはじめから終わりまでなされるわざ」とよんでいる、最高または至上の自然の法(supreme or summary law of nature)は、人間によって見出されることはできないとほのめかしてはいるけれども、しかし、そのことは、精神の能力(capacitie of the minde)をおとしめるものではなく、人生が短いとか、仕事の連絡がまずいとか、人から人への知識の伝達がうまくないとかいうような障害や、その他、人間として免れえない多くの不都合によると考えてよかろう。⁽⁴³⁾

続けてペイコンは、「至上の自然の法」さえをも人間が見いだす可能性がほのめかされているとして、ソロモンが書いたとされる「箴言」の言葉を引用する。

かれ〔ソロモン〕は、世界のどのような小さなものでも人間が探求し発見できないようなものはないという意味のことを、また別の箇所で断定して「人の霊は神の燈火のようなもので

あり、これをもって人はすべての秘密の内奥をもうかがう (The Spirite of Man is as the Lampe of God, wherewith hee searcheth the inwardness of all secrets)」⁽⁴⁴⁾と語っている。⁽⁴⁵⁾

ベーコンは至上の自然の法の獲得に関して、はじめはそれを否定的に捉えた意見を、そして続いてその可能性を肯定的に捉える視点を紹介している。これは『学問の進歩』の冒頭でなされる人間の知識の増大の是非についての議論の中に位置づけられ、最終的に知識は人間を誇らせるためではなく、愛と共に活かされ、人類の善に向けられねばならないと述べられている。注目すべきは、そのような文脈の中で至上の自然の法の発見が「人の霊 (Spirite of Man)」のはたらきに委ねられており、その対象が「すべての秘密の内奥」と措定されている点である。ここから、至上の自然の法が「秘密」の一種であり、その発見が人間の精神 (mind) によるというよりも霊 (spirit) によってなされるという次元があらわれる。これは、至上の自然の法の発見を目指して営まれる自然哲学が、最終的には人間の霊のはたらきに委ねられるという宗教的性格を兼ね備えたものであることを示唆する。ベーコンが別の著作の中で自然哲学の頂点から自然神学へと至る道は短く、用意されていたということを述べていることも考慮すれば、自然探求のこうした宗教的次元はベーコンの思想において決して局部的にあらわれるものではない。人は自然の探求を通して自然の法を見出し、更には至上の自然の法を探し求めることによって、それらの法をつくり出した神との関係を深めていくのである。

実際、『信仰告白 *Confession of Faith*』によれば、ベーコンはキリストの受肉が「神が被造物に舞い降り、被造物が神へと上昇する」階梯をもたらしたと考えていた。神と被造物は、自然の法による統治を介してのみ関係をもっていたが、受肉の後、神と被造物の関係は変化する。それはキリストという神の子でありながら人間の肉を伴う存在を誕生させたのと同時に、被造物の往来を可能にする階梯をもたらした。つまり、はっきりとした様相を想定するのが難しい「法」によって繋がれていた神と被造物の関係は、受肉という形而下の性質を帯びるという現象を経て、階梯という物理的なつながりによって結ばれることになったのである。

しかし、創造主となって被造物と交わるという彼の永遠で無限なる善と愛から、彼の永遠なる目的のなかで、彼は神格のなかの一つの人格を、彼の被造物の一つの性質——彼の被造物のなかの特別な一つ——と融合すべきだと命じた：仲介者の人格の中に、神が被造物にまいおり、被造物が神へと上昇する、真の階梯が設けられるために (so in the person of the Mediator the true ladder might be fixed, whereby God might descend to his creatures, and his creatures might ascend to God) : (中略) 彼はその創造物として人を選んだ—永遠なる神の子の人格が融合されるべきものとして、人の性質が選ばれた。⁽⁴⁶⁾

ここに示されているように、神の子が受肉したことによってもたらされた階梯は、神と被造物の行き来の橋渡しをするためのものである。階梯を介して人は自然の中に認められる自然の法を見出すよう神によって規定づけられる。つまり、神によって置かれたその法を遡及して行くことによって、人はその発信者である神へと至ることが可能なのである。キリストの受肉によって神と被造物の間に階梯がもたらされたからこそ、人はそれをひとつひとつ辿ることによって神へと近

づくことができるようになった。そうした階梯のイメージと視覚的に類似するのは「鎖」のイメージで、両者はともに神と人間とのつながりをあらわす。例えば先述したことだが、バイコンは、人間が自然の中に「第二原因」の「鎖」がむすばれるのを見て、「天の摂理や神性へと飛んでいかなければいけない」と述べている。また別の箇所でも、第二原因の連鎖を自然の鎖と表現し、それを辿っていく人間が最高原因である神に繋がっている、もしくは繋がれているのだという。

人間の精神が感官にもっとも近い第二原因を思いうかべるとき、もしその点にいつまでもとどまっているなら、最高原因を忘れるようになるであろうが、しかし人が更に進んで、それらの原因が孤立したものでないことを悟り、摂理のわざと理解するとき、詩人たちの比喻に従えば、自然の鎖の最上部の環がきつとユピテルの椅子の脚に結ばれているにちがいないと容易に信ずるであろう。⁽⁴⁷⁾

7. 結論

十六世紀末期のイングランドは宗教改革の余波を受けていたのであり、そのため宗教をめぐる状況は安定していたとはとても言い難い。国教会は十六世紀の前半に既に設立していたが、そのあり方をめぐって改革派の人々による反発は続き、隣国のフランスではユグノー戦争が続いていた。バイコンはそうした宗教をめぐる争いが絶えない中で、宗教がどのようにあるべきかについて考え、一定の理想像を見出していた。それは統一したキリスト教会であった。教会が多様に分裂していたがために繰り広げられた争いを目の当たりにしていたバイコンは、宗教のあり方を批判するだけでなく、新たな宗教的営みのあり方を提示する。キリスト教には伝統的に啓示神学と自然神学の両方が認められてきたが、啓示や神の権威に依拠して展開される神学的主張は対立の原因になるだけだと考えたバイコンは、啓示神学ではなく、それを支える位置づけにある自然神学の方に着目した。自然あるいは世界の全体が既に神の存在証明になると考えたバイコンは、新たな自然哲学が当時の宗教不信に対する薬となるだけでなく、「侍女」として宗教を立て直す役割をも果たすと考えた。更に、バイコンは自然哲学自体を全般的に「聖なる」行いと位置づけ、自然の哲学的探求にある宗教性を認める。ピラミッド状に構想された自然哲学は、個々のものを扱う自然誌を基礎として、そこから一般化され自然学と形而上学へと上昇し、最終的にピラミッドの頂点において「至上の自然の法」あるいは「永久で齋一な法」に統一される。バイコンは、「至上の」自然の法を探し求めるよう人間の精神は神によってデザインされているのだと考え、それを見出す可能性を外典に書かれたソロモンの言葉に依拠して主張する。最終的にそれが可能であるのは、「人間の霊」が「神の燈火」のように、「すべての秘密の内奥をもうかがう」と言われているからである。人が自然を探求しその秘密を明るみに出していくという営みは、神によって導かれたものだとバイコンは考えていたのである。言い換えれば、自然の探求は神へと導かれる道筋として想起されていたと考えられる。それを裏付けるのが受肉によって神と被造物の間に設けられた「階梯」の概念であり、それを介して両者は行き来することが可能になっていたのだ。

このようにしてバイコンは自然探求に新たな宗教の可能性を見出し、自然探求が神へと至る聖

なる行いであると主張することによって、自然探求が宗教として成り立つことを示している。これをベーコンによる当時の宗教批判に照らしあわせて考慮するなら、ベーコンは、宗教をめぐる争いとキリスト教界の分裂に幻滅し、何が問題の原因となっているかを分析した上で、啓示ではなく、神の残したもう一冊の書物である自然にこそ、平和的に統一という宗教的理想を実現する可能性が秘められていると考えたと言えるだろう。彼の著作全体を見渡しても、十六世紀が終わるまで、つまりベーコンが約四十歳になるまでの著作の中には宗教に関して書かれたものが多い一方、十七世紀以降の著作には彼による実際の自然哲学的考察が書かれたものが多い。そのような著作の傾向からしても、ベーコンの思想にあらわれる自然探求のすすめは、宗教のあり方を彼なりに模索した結果もたらされた解であったと理解できる。彼が自然哲学を「信仰の全く試験済みの栄養」と位置づけ、「少しばかりの自然哲学は精神を無神論へと導くが、更なる探求は精神を宗教へと引き戻す」と述べるのは、信仰の軽視が認められた時代にそれを再起させようとしたからに他ならない。ベーコンは自然探求が宗教を危機から救うと考えるだけでなく、それ自体が神の御業を辿るという意味において、神との関係を築くという宗教的目的を果たすと考えたのではなかろうか。

註

- (1) S. Matthews, *Theology and Science in the Thought of Francis Bacon* (Hampshire: Ashgate Publishing, 2008), S. McKnight, *The Religious Foundations of Francis Bacon's Thought* (Columbia: University of Missouri Press, 2008), Johann Mouton, "Reformation and Restoration in Francis Bacon's Early Philosophy" *Modern Schoolman* 60 (1983): pp.101-112など。
- (2) B. Vickers, *Francis Bacon The Major Works* (Oxford: Oxford University Press, 2008) p.496. この著作はベーコンの死後、イングランドにおける王党派と議会派の対立が続けられていた清教徒革命中の1641年と、王政復古後の1663年に異なるタイトルで出版されている。*A Wise and Moderate Discourse concerning Church-Affaires* (London, 1641), *True Peace: or a moderate discourse to compose the unsettled consciences, and greatest differences in ecclesiastical affaires.* (1663). (Vickers, p.501)
- (3) Martin Marprelateはあくまでも偽名で、実際に問題となったパンフレットが誰によって書かれたものであるかについては見解が定まっていない。彼らが攻撃したのは国教会の監督制 (episcopacy) で、国教会内の特定の聖職者を批判しているという点がマープレイトによる攻撃の特徴である。マープレイト論争の特徴は、攻撃された国教会側も同じようなスタイルを用いてパンフレットに対抗したという点である。(Vickers, p.496)
- (4) *An Advertisement Touching the Controversies of the Church of England, in The Works of Francis Bacon*, ed. J. Spedding, R. L. Ellis, D. D. Heath, 14vols. (London: Longman, 1857-74) vol.8, p.76.
- (5) *Works*, vol. 8, p.76.
- (6) *Works*, vol. 8, p.75.
- (7) *Works*, vol. 8, p.75.
- (8) *Works*, vol. 8, p.75.

- (9) *Works*, vol. 8, p.76.
- (10) “Of Unity in Religion” in *The Oxford Francis Bacon XV. The essayes or counsels, civill and morall* (以下Ess.の略称を用いる) p.13. 『随筆集』成田成寿訳、福原麟太郎編集「世界の名著25」所収、中央公論社、1979年、71頁。引用に際しては邦訳を主に用いたが、適宜修正を加えた。
- (11) *Vickers*, p.499.
- (12) *Ess.* p.12. 『随筆集』69頁。
- (13) *Ess.* p.11. 『随筆集』68頁。
- (14) *Ess.* p.11. 『随筆集』68頁。
- (15) *Ess.* p.11. 『随筆集』68頁。
- (16) マタイ福音書12:30
- (17) マルコ福音書9:40
- (18) *Ess.* p.13. 『随筆集』70頁。
- (19) “Of Atheisme” in *Ess.* p.51. 『随筆集』110頁。
- (20) *Ess.* p.51. 『随筆集』110頁。
- (21) 二冊の書物の関係については、Steven Matthews, “Reading the Two Books with Francis Bacon: Interpreting God’s Will and Power” in *The Word and the World: Biblical Exegesis and Early Modern Science.* ed. P. J. Forshaw and K. Killeen, (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2007): pp.61-77. が詳しい。
- (22) *Oxford Francis Bacon IV. The Advancement of Learning*, p.9. (以下、ALの略称を用いる) 『学問の進歩』服部英次郎、多田栄次訳「世界の大思想6」所収、河出書房新社、1966年、12-13頁。ベイコンによる神学と哲学の問題については、下野葉月「フランシス・ベイコンにおける神学と哲学」『科学史研究』第50巻(2011年) pp.11-16を参照。
- (23) *AL*, p.192. 『学問の進歩』198頁。
- (24) *Works*, vol.3, p.221.
- (25) *The Oxford Francis Bacon XI. The Instauration magna part II: Novum organum*, pp.144-145.
- (26) 『農耕詩』1:281-2.
- (27) ヨハネの黙示録4:8
- (28) *AL*, p.85. 『学問の進歩』89頁。
- (29) 『信仰告白 *Confession of Faith*』はベイコンの死後15年経った1641年に初めて出版された。出版された三版のうち二版に「Penned by an Orthodox man of the reformed Religion」という副題がついた。信仰告白はプロテスタント教会の信条を表したものであるとして宗教改革時に重要な役割を果たしたが、ベイコンによる信仰告白は国教会の信仰簡条や他の信仰告白と形式や内容が異なるため、何が契機となって書かれたものなのか定かではない。(Vickers, p.560)
- (30) *Confession of Faith, in The Works of Francis Bacon*, vol.3, pp.220-221.
- (31) *AL*, p.8.
- (32) *Works*, vol.3, p.221.

- (33) *AL*, p.88. 『学問の進歩』 92頁。
- (34) *AL*, p.88. 『学問の進歩』 92頁。
- (35) ベイコンによる数学の位置づけに関しては, Graham Rees, “Mathematics and Francis Bacon’s Natural Philosophy” *Revue internationale de philosophie* (1986), 159/4, pp.399-426, Graham Rees, “Quantitative Reasoning in Francis Bacon’s Natural Philosophy” *Nouvelle de la republique des lettres*, (1985) 1, pp.27-48 を見よ。
- (36) ベイコンの自然の法概念と創造観および形相の関係については, 坂本邦暢「質料に宿る量と力」『科学史研究』第50巻(2011年) pp.31-36を見よ。
- (37) 自然の法と道徳法の相即性については, Johann Mouton, “The Summary Law of Nature: Revisiting Bacon’s Views on the Unity of the Sciences” in *Francis Bacon’s legacy of texts: the art of discovery grows with discovery*, ed. W. A. Sessions (New York, AMS Press, 1990) pp.139-150. を参照。ベイコンによる自然法理解についてはBernard McCabe, “Francis Bacon and the Natural Law Tradition” in *Natural Law Forum* 9 (1964), pp.111-121.が詳しい。
- (38) *AL*, p.136. 『学問の進歩』 140頁。
- (39) *AL*, p.136. 『学問の進歩』 140頁。
- (40) *AL*, p.180. 『学問の進歩』 185頁。
- (41) *AL*, pp.143-144. 『学問の進歩』 148頁。
- (42) *AL*, p.6. 『学問の進歩』 10頁。
- (43) *AL*, pp.6-7. 『学問の進歩』 10頁。
- (44) 箴言20:27
- (45) *AL*, p.7. 『学問の進歩』 10頁。
- (46) *Works*, vol.3, pp.219-220.
- (47) *AL*, pp.8-9. 『学問の進歩』 12頁。

Francis Bacon and the Philosophical Pursuit of Nature as Religious Enterprise

Hazuki SHIMONO

Francis Bacon (1561-1626) is best known for his promotion of natural philosophy, and that his writings are wrought with religious overtones is commonly acknowledged. But why did he present his promotion of science in a religious manner, and why did he assign sacred purpose to his studies of nature?

Having lived through the age of sectarian turmoil following the Reformation, Bacon was keenly aware of the doctrinal and institutional problems surrounding the Church of England, as evidenced in his *Advertisement Touching the Controversy of the Church of England* (1589) and *Essays* (1625). In these works, he analyzes the character of the religious problems he observed, and by doing so reveals his religious ideal of a transcendent unity of the christian church, envisaged against the reality of its separations and disruptions. I argue that Bacon set out to achieve this ideal of unity through the philosophical pursuit of nature, as a viable alternative to theological endeavors based on divine revelation.

Since nature for Bacon was an obvious manifestation of God's power, the confirmation of that force through studies of nature was potentially a way to approach God, and at the same time, a means of resolving disputes arising from an excessive reliance upon revelatory interpretations. In the name of natural philosophy, he frames what is essentially for him a religious endeavor, where one is to start from the collection of numerous observed facts in natural history, and virtually work one's way up through physics and metaphysics in making further generalizations, to finally reach the "summary law of nature" at the apex of a pyramidal structure.

The religious character of this "summary law of nature" will be examined through the analysis of ethical qualities he assigned to other "laws of nature," and secondly, through his discussion on how such an axiomatic truth might be attained. I will make reference to his theological concept of "ladder" positioned between God and Creation, as it appears in his *Confession of Faith*, to support my argument of his belief in the existence of what he otherwise called a 'supreme' law of nature.